

第四回「文芸思潮」短歌賞 発表

第四回「文芸思潮」短歌賞に御応募くださり、まことにありがとうございます。今回は三九名七八首と少なくなりましたが、日本の伝統に則った自然と人生とに和した叙情歌としての短歌は深みを感じられ、期待に大いに応えていただいている印象を抱きました。厚く御礼申し上げます。

現代の短歌は大手の新聞や商業短歌誌などを見ても、荒唐のうちにあり、正岡子規が提唱した近代短歌から離れて言葉や観念の遊びになっていきます。これに歯止めをかけるべく、この短歌賞を始めましたが、応募作品の中には、今回も真の短歌精神が生き生きと漲っていることを感じるものができました。残念ながら今回は前回に続いて最優秀賞は該当作がありませんでしたが、この息吹のうちにまた優れた歌が寄せられることを次回に期待したいと思います。

集まった応募作の中から、まず予選担当によって第一次、第二次、第三次の選考が行なわれ、それらを通過した作品を対象に、五月六日、福田淑子、五十嵐勉の選考委員により、最終選考が行なわれました。厳正な審査の結果、以下の通り決定しましたので、ここに発表させていただきます。

第五回「文芸思潮」短歌賞は、明年も今年とほぼ同じ要領で募集を行なう予定です。どうぞ奮って御応募ください。

（「文芸思潮」短歌賞選考委員会／文芸思潮）

第四回「文芸思潮」短歌賞

最優秀賞

該当作なし

優秀賞

石井和子

（和歌山県西牟婁郡）

新井巳喜雄

（埼玉県児玉郡）

渡良瀬愛子

（千葉県柏市）

南雲和代

（東京都北区）

奨励賞

佐山広平

（愛知県春日井市）

風間洋平

（新潟県新潟市）

東家芳寛

（佐賀県佐賀市）

野葛間

（長野県上田市）

平尾三枝子

（岡山県岡山市）

葵井禎子

（京都府京都市）

緋沙

（沖縄県八重山郡）

武藤蓑子

（東京都多摩市）

華央子

（北海道茅部郡）

室町 眞

（東京都町田市）

竹浪和夫

（青森県むつ市）

熊倉アンナ

（東京都世田谷区）

選評

結晶力不足

五十嵐 勉

第四回の短歌賞は、前回に続いて最優秀賞が出ない結果になった。「深い思いと叙景が密接に絡み合って天に届くような昇華を見せている名歌」を一方で期待しつつ、また一方で、秀歌・名歌は、そう簡単に出るものではないと現実を直視することの繰り返しだが、全体に層が厚くなっていることは、実感できた。ほとんどが三次予選以上のレベルであったことは、それを物語っている。

二年連続で最も最優秀賞に近かった歌は石井和子氏の二首である。

「息づきて村雨はしる山峽をひとり生はまぼろしに過ぐ」

上の句は、自然の動きのある描写が調べとともに生きていて素晴らしいのだが、後半が抽象、観念に流れ過ぎていて結像の緊密性がやや欠けるのが惜しまれる。「ひとりの生は」は一般的過ぎる。言いたいことはよくわかるし、その内容の深さも確かに響いてくるのだが、後半も具体的な自然描写の中に結晶させれば、秀歌の高さを得ただろう。

「金魚のみ空き家の池を泳ぎたり懸樋の滴響く水面を」

廢屋の侘しさと静けさはよく出ていて、人の世の無常は伝わってくるが、いつも同じテーマや題材だと、やや食傷気味になるので、少しは方向を転じてみることも歌の世界を広げることになるのではないか。この題材を続けるとなると、哲学のより深い掘削力が必要となる。次回を期待したい。

南雲和代氏の作は副題に「新潟水俣病」とあるので、それに沿ったものとして読む必要があるのかもしれない。

「阿賀野川下りし船無くふぶく雪シベリアよりの白鳥飛来す」

冬の吹雪の世界にシベリアからの白鳥がいつそう荒涼とした気配を醸して、一つの世界を確かに立ち上げてくる。ただ、それがどう新潟水俣病と結びつくのかは、はっきりしない。雰囲気はあるが、焦点に欠ける。

惜しくも奨励賞に留まったが、佐山広平氏の

「青春の掌に刻まれし女の影悲しみは遠く彼岸花散る」

については、私の評価は高かった。順序を少し入れ替えさせてもらったが、青春への哀惜は、人生への哀惜となっている。「彼岸花散る」の結語は見事である。佐山氏にはこういう歌をどんどん作ってほしい。

奨励賞の風間洋平氏も陰影の深い老年の悲哀を造形している。

しかし九十歳という年齢でこの自然からの感受性は、卓越したものを感じる。もう一つ磨き上げる象徴の高さを得たら、素晴らしい歌群が咲きこぼれるであろう。

同じく優秀賞の渡良瀬愛子氏の

「紫雲英田の風に従ふ花の笑み鋤き込まれゆく今朝の宿命に」

も、耕すその作業によって命を失っていく宿命の前での花の揺らぎが深みを添えているが、ルビの多用が作り過ぎている煩さを感じさせるのが惜しまれた。また「紫雲英」を「れんげ」と読ませるその必然性も、伝わりにくいものがある。

もう一首

「透きとほる山荷葉とう花に遇ふ母とはぐれし霧の山道に」は趣きがあつて、前の歌よりも強引さは溶けている。

「山荷葉」という花は白い可愛いらしい花で、雨に濡れるとその花びらが透明になる性質があり、これが母が見えなくなったことや霧と絡めて、趣きの重奏を深めている。ただ、よく考え、思いを巡らせないと立ち上がってこない点で、弱点と言える。年々歌が深みを得ていることが進歩を感じさせる。

優秀賞二回目の新井巳喜雄氏は、捨てられた集落の姿を描く短歌に一定の傾向を表して、今回もその世界を謳ってきた。

「夜半に起き不随の妻の用足しを見守り終へて虫の音を聴く」

「誕生日の吾に夕餉を寿ぎし妻はまもなく施設へ行きぬ」

この連作は、二つによって互いをより立体的に立ち上げらせ、老年の愛情空間の宿命を響き合わせる一つの世の姿を切り取っている。

東家芳寛氏の「雀の涙」は、自己のものはや避けることのできない病を、雀の涙に託して、その悲しみを歌う詠嘆は、真つ直ぐ迫ってくる。

「啼きにける雀の涙落ちつらむ我の病の不治なりしゆえ」は、その内側に抑えている悲嘆が凝縮され、一つの結晶にまで高まって雀の涙を光らせてくる。雀に託すことよって命の尊さを歌い上げる詠嘆は、普遍的な力として広がっていく。

野葛間氏の

「瘦身の君がこほれるみづづみを試歩なすことし夜の病棟」

は、病院での深夜の歩行の危うさをむしろ比喩の世界を拡大して儚さを露出させたプリズムのような、分光展開に妙がある。

同じ病院でのドラマを歌ったものに、平尾三枝子氏の「告げられし夫の病名反芻し呑み込むまでを指先みつむ」がある。リアリティのある描写は、迫ってきて、重みがある。

また老後の苦衷を乗せたものにもいい作があり、竹浪和夫氏の

「妻病めば途方にくれて菜を刻む厨くりやにわれは背を丸くして」

も、普段は台所に立ったこともない男性が、妻の病によってあらためて妻の立場に立たされ身の行末を想う当惑がよく出ていて、生活感が匂っている。

回顧の領域も、老年では豊かさを増してくる。

「旧友の次々に逝き老沼で、水切り、すれど石は弾まず」

室町眞氏は、小説では銀華文学賞の優秀賞を受賞して居る実力者で、それなりに過去への思いは表出されているが、「老沼」という言い方にやや作爲の固さがあり、現実と溶け合っていない流れのぎこちなさがある。

「学び舎に響きしシュプレヒコールは耳孔の奥に葬り去られ」も、むしろ耳の奥に時として鳴り響いてくる方が、回顧の意味が深くなるだろう。もっと青春の意味を鋭く問いつつ表現を磨いていけば、光を増していくものと思われる。少し直せばさらによくなるだろうと想われるものも多かった。むしろ改作を期待して奨励賞とした経緯もある。

武藤養子氏の

「覚めてなほありありとして故郷の蟪蛄けいこの鳴く野の夢から出られず」は、深奥に眠る故郷の地が現在に湧出してくる生きて居る過去の生々しさがよく出ているが、「覚めてな

ほありありとして」と「夢から出られず」は重複している。

華央子氏の

「草萌の光る小径を行く吾に枝の子栗鼠くりねのするりと去りぬ」は、全体的に雰囲気はあるが、何を歌いたいのかはつきりしない。前半はいいが、後半に決めがない。「子栗鼠」は「小栗鼠」か。「するりと」はおもしろいが、それに奪われて、小径の静寂を表したいのか、焦点が結ばなくなった。

「岩穴の即身仏の御前に雫の音色はらわたに染む」

という葵井禎子氏の歌には、「古知谷阿弥陀寺」という添え書きがあるが、「はらわたに」という部分が厳かなムードと離反する。「耳奥に響く」とか、「胸底を打つ」とか、工夫が必要だろう。

熊倉アンナ氏はポーランドに母親がいるとのことで、一時イギリスへ発つ日を歌った

「出発の日は雪予報つぼみまで遠い桜をあとに残して」

は、説明を受けるといいのだが、その状況がわからないと伝わってこない欠点がある。

「わたしには戦いをとめる手立てなく母の祖国にミサイル落ちる」との関連によってやっと補えるので、この立場を理解させる何か補助のような仕掛けが必要だろう。

朝日歌壇や読売の歌壇でも、日本人が詠んだウクライナ戦争への反戦歌は掃いてまともに捨てたくなくなるような非同情歌がいっぱいある。この歌もそれらと混同される弱さ

がある。具体的な言葉に沿って、主体的な強さをもっと出し、当事者としての心を剥き出しにする表現が必要だろう。いずれにしても戦争を歌にするのは、平和のなかで自然を凝視することよりも遥かに難しいことを自覚しておかなければならないだろう。

日本の短歌は、いま危機に瀕している。全国紙の歌壇はどこも歌になっていないヘラヘラ紛い歌がほとんどで、人間の真情を深く高く歌い上げた短歌は姿を消している。まともな感受性を示している歌はどこへ行ってしまったのか、自分の生活や人生を深く見つめて生を問う近代短歌はどこへ消えてしまったのか、嘆かずにはいられない。

しかしかろうじてこの「文芸思潮」に集まってくる短歌には、その方向が見える。まだまだ未熟の観があるが、ここに希望を託すしかない。あと、地方の、斎藤茂吉の脈流を引き継ぐ誌の周囲にはその伝統の力が残っているように見受けられる。スマホやインターネットなど便利機器に毒されない、自然や命と真剣に向かい合う真の短歌が生み出される可能性はまだ大きく残っている。そこに期待したい。状況を見つめ、それを自然の中で生きる命に問いかけて、その声を聞くことは、未来への力でもある。言葉が腐れば文化も腐る。文化が腐れば未来は腐る。文芸復興の意味はそこにある。

佳作



五十嵐 勉
いがらし つとむ
1949 山梨県生まれ
79「流瀆の鳥」で群像新人
長編小説賞受賞
98「緑の手紙」で読売新聞・
NTTプリンテック主催第1
回インターネット文芸新人賞
最優秀賞受賞
2002「鉄の光」で健友館文学
賞受賞
15より歌人越山しづかの勧め
で短歌誌「美知思波」入会

- 三井 瑛子
- 岡田 美幸
- 陶久 要
- 柘 二郎
- 岩谷 隆司
- 海神 瑠珂
- 高橋 良
- 宮脇 すみれ
- 川名 淳
- 三ツ木 健
- 械冬 弱虫
- 南 大希
- 上野 卓男

入選

- 東横 恵愛
- 東風 佳子
- 坂井 傑
- 山本 明



「同時代人」への手紙

福田淑子

私たちは日々、泡のごとく立ち上がりくる思いの文を韻律にのせて詠うという文化をもち、千年の間、和歌という表現形式を手放さずに短歌を育んできた。人間がことばを発するようになって以来、リズムを持った詩のような表現が成立するまでにどのくらいの年月を要しただろう。一度手にした歌は、私たちの人生の伴走者としてもはや手放すことはできない。もし、AIの発達で、人工頭脳のほうが人間よりうまい俳句や短歌を作るといふようなことを言い出したなら、もし名歌をAIに作らせようといふような目論見を持つことがあったら、その後の世界では間違いなく人間の心は退化していくに違いないと思う。

人は自分に降りかかる悲しみや苦しみの体験を、それぞれのかたちで引き受け、どうにかこうにか己というものを保ちながらやり過ごさざるをえない。生まれ出て死ぬまでの間に何の不運にも遭遇しないまま、こともなく天寿を全うするなどという人は、ごく稀であろう。長く生きていれば、いろいろなことがある。そんなことを百人百様に語りかけてくれるものの一つが短歌である。様々な人生へ慈しみが言葉を尽くした歌の調べによって伝わり、読む側にし

みじみとした共感が湧いてくる。色々なことを凌ぎ、感受しながら生きている同時代人がいる。そのようなことを感じさせてくれる作品を次に抽出した。

石井和子

鳩が卵を温め、雛がかえるように抱卵している光景はほほえましく喜ばしいはずである。私たちも新しい生命の誕生を願う、喜び、そして幼い命を慈しむ。しかしこの歌の上の句は「哀しむにあらざるものを」と、まるでそれは哀しいことであるかのようなのである。生きとし生けるものの生命の誕生、この世を生きることには悲しみも伴う。命を育むことは、哀しむものではないだろうがそうはいうものの命には哀しみもつきまとう。だが、春あけぼのの光は美しく、卵を抱くものを慈しみ祝福する。そうして私たちはここまで命を繋いできたのだから。抱卵の鳩という名詞止には深い余情が感じられる。「哀しむ」にルビがあるが、それは不要である。作者は九十歳である。これまでにどのような人生を歩まれたのだろう。命に対する深い洞察と慈愛がしみだしてくるような一首である。

新井巳喜雄

限界集落だろうか。いや、最近では街中にも相続人不明の空き家が朽ちて放置されていると聞く。樹木の中に立つ空

き家であるから、これはそれなりの屋敷なのであろう。最後の住人の表札がまだそこにあることで、その荒れ廃れた家が、かつて主人が健在だった頃の活気のある家の様子を彷彿とさせて、一層寂しさをともなって朽ち果てた家が提示される。現在と過去の対比がみごとに映し出されて、そこに流れた時間を詠み込んだ一首である。

渡良瀬愛子

霧の山道で母親とはぐれたのはいくつの作者だろうか。いくつであれ、山道で連れとはぐれば、不安と孤独に陥るだろう。幼い頃であればなおさらだが、「透きとほる花」に出会ってそれに心を奪われている間は、霧の山道にあっても至福の時であろう。人は花に救われることがある。山荷葉は得も言われぬ美しい花である。霧の中から浮かび上がった黙して可憐に咲く白く透明な山荷葉は、作者には天使に見えたのだろうか。山野草が世界にあることを感謝したいと思う。花に慰められることは多いと改めて感じ入る。人と自然のハーモニーが美しい。

阿賀野川下りし船無くふぶく雪シベリアよりの白鳥飛来す

南雲和代

阿賀野川は福島県に源流を持ち、新潟県を通って日本海に流れ込む川である。雪がふぶく中、シベリアを思い起す白鳥が飛来してきたのだろう。寒々とした光景である。

下る船も今日は見えないと詠うことによって、さらに寒さ厳しい情景が強調されている。そういえば、阿賀野川は新潟水俣病で知られた水銀汚染を経験したところである。作者は映画「阿賀に生きる」を観たのだろうか。対で「日常」と不在を見つめ監督逝きぬ公害の阿賀雪降りやまず」の一首もあつたが、掲出歌のほうが一首独立して鑑賞できる。山間のつばな真白き原に坐す雪降らぬ地に久しく住めば

緋沙

かつては雪の降り積もる土地に暮らしていたのだろう。今は、雪の降らぬ地に久しく住み続けている。雪の降り積もる土地の生活はなかなか辛いものと聞く。だから、豪雪の地の友には雪の降り積もらない地の暮らしは極楽と言われる。しかし、年を経てかつての雪の降り積もる地もなつかしい。一面の白銀。それをつばなの咲く野原で思い出している。つばなはチガヤとも呼ばれ一面の白銀の穂が雪のようである。作者は今年九五歳。「久しく住めば」の表現からその人生の時間の流れが感じられる。「山間」にルビは不要だが、ふるるのであれば「やまあひ」であろう。瘦身の君がこほれるみづうみを試歩なすとし夜の病棟

野葛間

親しい人が病床にあるのであろう。痩せて足の衰えた姿で、まるで凍った湖の上を歩いているようなおぼつかない足取りで恐る恐る試歩する姿。その姿を今にも割れるかも

しれない湖の水の上を行くと比喩したところが秀逸。ただ、第五句が「夜の病棟」で終わるとそれ自体が余韻を持ってしまつて、夜の病棟に視点が変わるとそれ自体が余韻を持ってこぼれるみづうみ」も「試歩なすことし」も、すべてが夜の病棟の比喩なのかも読めてしまう。語順にもう少し工夫がいろいろあるのではと思うのだが。

武藤妻子

人は様々な経験をし、多くのものが記憶の層に堆積している。夢とは不思議なものだ。思い出さなくて手練り寄せられているわけではないのに、何度も何度も表層に浮かび上がってくるという光景があるものだ。夢であるから、なぜなのかわからないが、覚めてなお夢の中に残り残されているような、そこに佇んだままでいたいような光景なのだろう。樺太へ征きたる叔父の帰還待ち陰膳供へし祖母を忘れず

竹浪和夫

大戦終結後、戦場から戻ってこなかった身内を持つものは少なかつただろう。長い間帰還しない人の無事を祈って膳を用意することを陰膳というが、この叔父もついに戻ってこなかつたのだろうか。戦争の犠牲者は爆撃を受けた人々や、戦場に駆り出されたものだけではない。大切な人を戦場に送り出す人も、戦士の報を受け取る家族もそのひとりなのだ。そんなことを今、改めて思い知らされる。

これもつらい心境の歌である。不治の病と聞かされた時の愁嘆はことばにならない。雀の啼く声も哀しく聞こえる。雀よ、涙してくれ、きつと共に心を痛めてくれることだろう。雀の鳴声が妙につらく聞こえてくる一首である。青春の掌に生まれし女の影悲しみは遠く彼岸花散る

佐山広平

青春の日に出会った忘れられない人がいる。悲恋であるか、別離であるか、青春という時代の記憶は格別なものである。彼岸花の散る頃、掌に残る記憶は影のようにその人呼び起こす。

母斃れし長月のまた巡り来て庭にコスモス数多咲きたり

海神瑠珂

母が斃れたのがコスモスの咲く季節なので、コスモスが咲くと、自然と母を思い出すということだろうか。「斃れし」は亡くなったということを表しているのだから、コスモスの花と母との関係は、などもう少し歌の焦点を定めてはどうだろうか。ところで「斃れし」にルビは不要だがふるのであれば「たふ・れし」であろう。

総評

身近なものへの慈しみ、過去の思い出、現在を生きるじたばたなど、作品の中の固有の世界が、韻律を持った言葉によって開かれる。詠むもの、読むものの意識が交差して共感しあう、そのような貴重な時間が短歌のなかに編み込

岩穴の即身仏の御前に雫の音色はらわたに染む

葵井禎子

なにを願って即身仏になられた仏だろうか。そんなことを思うと即身仏の鎮座する岩穴に滴り落ちる雫の音は格別に響くことだろう。そんな感慨の瞬間をとらえたところは印象的だが、「はらわたに染む」はいささか表現が直截にすぎないだろうか。

風間洋平

不自由な体の妻が用足しをするために夜半につきそう手持無沙汰の夫に、外の虫の音が音楽のように響き、思わず耳を傾けている。見守り終えてその豊かな秋の音色に改めて聞き入る。秋の夜半の虫の音を背景に、老いた夫婦の情というものの有り様がしみじみとした光景とともに浮かび上がってくる。

告げられし夫の病名反芻し呑み込むまでを指先みつむ

平尾三枝子

にわかには呑み込めない病名、よもやうちの人かと、戸惑う。それを事実として受け止めるのには、かなりの逡巡と当惑があつただろう。その心の様子を「反芻す」と表現したのが、共感を呼ぶ一首である。

東家芳寛

啼きにける雀の涙落ちつらむわれの病の不治なりしゆえ

まれている。わが思いを乗せて他者に届ける短歌の形式にはやはり昔から大切にしてきた「よい歌」の約束事がある。例えば、五七五七七の枠内に収め、かつ韻律を伴う表現であつてほしい。歌は読み手に取って意味不明なものであつてはならない。辞書で引けばわかる漢字にルビを振らない、また、勝手な読みをルビで指示しない。歌は「われ」の視点を大切に、調べに個性がない徒事歌にならないようにする、などなどである。歌を仕上げる際に、もっと丁寧な推敲していただければ、こちらがさらに深く受け止めることも可能な作品もあつたのではないかと思う。次回にさらなる佳作を期待したい。



ふくだ よしこ

福田淑子

- 1950 東京都生まれ
- 2003 短歌評論「馥郁たる叛逆—斉藤史論」で第70号『文芸埼玉』評論部門入選
- 07「孤独なる球体」で第8回大西民子賞受賞
- 18 歌集『ショパンの孤独』で第13回日本詩歌句随筆評論大賞短歌部門優秀賞
- 短歌誌「波濤」を経て、現在短歌同人誌「まろにゑ」・現代短歌〔舟の会〕、俳句同人誌「花林花」所属 俳句誌「架け橋」会員